



アイスランド語における文音調（イントネーション）の記述に向けて

メタデータ	言語: jpn 出版者: 北海道言語研究会 公開日: 2016-04-27 キーワード (Ja): アイスランド語, イントネーション, リズム, 文の種類, 意味 キーワード (En): 作成者: 三村, 竜之 メールアドレス: 所属:
URL	http://hdl.handle.net/10258/00008872

アイスランド語における文音調（イントネーション）の記述に向けて

その他（別言語等） のタイトル	Towards a Description of Icelandic Tunes/Intonation
著者	三村 竜之
雑誌名	北海道言語文化研究
巻	14
ページ	147-158
発行年	2016-03-31
URL	http://hdl.handle.net/10258/00008872

アイスランド語における文音調（イントネーション）の 記述に向けて

三村 竜之

Towards a Description of Icelandic Tunes/Intonation

Tatsuyuki MIMURA

要旨：本小論の目的は、アイスランド語の文音調を記述する上で有意義かつ重要と考えられる基本概念の提案並びに整理・整備にある。アイスランド語はストレスアクセントの言語であり、これまで筆者は強勢の所在やリズムを考察する上で、音節構造や母音量等の要因に加え、音調の型やその遷移にも着目してきた。本論では、語の考察を通じてこれまで得られた知見を検証・補強すべく、筆者の採取した一次資料に基づき文におけるリズムや音調を考察し、その結果、以下に示すような、文音調の基盤を形作る諸概念の提案と諸側面の説明を試みる：文は一つないし複数のリズム上の単位から成る；単位の数や切れ目は文のテンポや意味に依存する；各単位には（ほぼ）一定の型の音調が被さり、これらの音調の総和と文の種類（例：疑問文）により文音調が決定される。

キーワード：アイスランド語、イントネーション、リズム、文の種類、意味

1. 序

1.1 本稿の目的と背景

本小論では、アイスランド語における文音調（後述）を捉える上で有益かつ重要な基本概念の提案と整理を試みる。アイスランド語の文音調は、局所的な音調を理論的な枠組みで捉える論考を始め、先行研究が比較的豊富であるが、その一方で、文音調の基盤となるリズムと音調の関係や、文の種類（例：疑問文）と音調の種類との関係など、ごく基本的な事柄がそれほど明らかにされておらず、アイスランド語の初学者が拠り所とすべき知識や情報の蓄積は未だ十分であるとは言い難い。

そこで本稿では、筆者が実地調査を通じて採取した一次資料の分析に基づき、アイスランド語の文音調の基盤を形作る上で重要かつ有益と思われる諸概念の整理や提案を試みる。これまで筆者は、アイスランド語の強勢の所在やリズムを考察する上で音節構造や母音量等の要因に加え、音調の型やその遷移にも着目してきた。本小論では、語の考察を通じて得られた音調に関する知見を出発点とし、発音教育にも資する文音調の諸側面の説明を試みる。

1.2 アイスランド語概説

アイスランド共和国（人口約33万人¹；首都：レイキャヴィーク Reykjavík）の公用語。印欧語族ゲルマン語派に属し、デンマーク語やノルウェー語などと共に北ゲルマン（ノルド）諸語を形成する。その他のノルド諸語に比して古語の姿を色濃く残しており、未だ形態論や統語論が複雑な点で特異である。

音韻論的には、無論、英語やドイツ語などには立てられない音素が立てられうるものの、音素配列の傾向性や音節量の制約（例：軽音節は強勢を担い得ない）など、その他のゲルマン諸語に通ずる性格を有する。また、強勢を担う閉音節における母音量（母音の長短）と音節末子音の数の間に見られる相補的な関係や制約（例：VCC/V:C; *V:CC）など、（デンマーク語を除く）ノルド諸語特有の特徴も保持している。

その一方で、ゲルマン語ではごく一部の方言にのみ観察される「前気音 preaspiration」（上付きの[h]で表記）を有し、また無声の鳴音（voiceless sonorants）も多いためか、全体的に無声摩擦音が豊富であるかのような聴覚印象を与える：

¹ 2015年1月1日時点の数字；典拠：Hagstofa Íslands: <http://www.hagstofa.is/Pages/95?NewsID=9581> 【2015年11月16日閲覧】

- (1) a. 無声鳴音: [m̥, n̥, ŋ̥, l̥, r̥]
 b. 前気音の例:
 (i) *vatn* [vát̪(t)̥n̥] 「水」
 (ii) *Kaupmannahöfn* [kʰéy̥p̪.man.na.hø̥p̪n̥] 「コペンハーゲン」

また、アイスランド語の閉鎖音は両唇音、歯茎音、軟口蓋音の三種類があり、それぞれ「声(voice)」の有無ではなく「気音(aspiration)」の有無で区別される点も特徴的である。

なお、ノルド語諸方言には、主強勢を担う音節の音調の「向き」(川上 1973: 45; 上野 1975: 49) が音韻論的に指定されている(いわゆるピッチ/高さ/高低アクセントの)言語(方言)もあるが、アイスランド語には該当しない。ノルウェー語の例²を以下に引用する³:

- (2) a. ノルウェー語南東部 (Oslo) 方言 (三村 (2009: 203))
 (i) *tenner* [¹tʰén.nər̥ LR] 「歯 PL.」 (< *tann* [¹tʰánn R] 「歯 SG.」)
 (ii) *tenner* [²tʰén.nər̥ FR] 「点火する PRES.」
 (< *tenne* [²tʰén.nə FR] 「点火する INF.」)
 b. ノルウェー語南西部 (Sandnes) 方言 (三村 (2014a: 80))
 (i) *avtala* [¹á:v.tʰà:la HML] 「約束する INF.」
 (ii) *avtale* [²á:v.tʰà:lə FML] 「約束」

1.3 調査・資料に関する概要

本稿で引用する資料は、先行研究の資料を除き、全て実地調査を通じて筆者が採取した一次資料である。2013年8月より年に二回程度の割合で首都Reykjavík市にて聞き取り調査を行っており、現在も継続中。本研究の中心テーマである文音調の資料は 2014年9月並びに2015年3月と9月に採取。インフォーマントはアイスランド語に関するこれまでの拙論において協力して下さった方と同じ方である⁴ (詳細は三村 (2015a) を参照)。

本研究でも一部引用する語の資料は、基本的にはいわゆる「調査票読み上げ形式」で採取したが(適宜、調査項目や関連事項に関する質問も行った)、一方、本研究に際して新たに採取した文の資料は、プレゼンテーションソフトウェア(Apple社Keynote)により作成したスライドを使用した読み上げ形式にて採取した。一つのスライドで一つの文を提示し、各スライドは4秒で切り替わるように設定。各文を一度ずつ読み上げてもらい(これを1セットとする)、全体で3セット実施した。調査の主たる目的が文音調に関する基本事項の確認であるため、資料として採取した文はいずれも単純な構造のものであり、数例の重文を除いては、全て単文である。なお、調査項目である文の作成に際しては、Árnason (1994-95, 1998) や Pétursson (1978) の資料を参考にした。

いずれの方式の調査においても、媒介言語としてデンマーク語を使用。インフォーマントの許可を得た上で、調査の一部始終をICレコーダーにより録音した。

² Oslo 方言のインフォーマントとして尽力してくださった Ine Marianna Hareide Nordbø さん(1978年生・女性)、並びに長年に渡り Sandnes 方言のインフォーマントとして尽力してくださった Brede Tingvik Haave さん(1988年生・男性)にこの場をお借りして心より感謝を申し上げる。

³ 音声表記の先頭に附した上付きのアラビア数字1と2はそれぞれAcc1と2を示す。また、音調の表記にはF(下降調)、H(高平調)、L(低平調)、M(中平調)、R(上昇調)の記号を用いているが、これらの記号は、飽くまでも各音節の音調を音韻論的な解釈を経た上で大まかに三段階に分けて捉えた、いわば簡略的な表記に過ぎない。従って、仮に同じ記号で表記された音節であっても、具体音声としては厳密には高さが異なりうる点に留意されたい。

⁴ インフォーマントとして調査に尽力をして下さった Auður Guðmundsdóttir さんにこの場をお借りして心よりお礼を申し上げる。なお、本調査は日本学術振興会科学研究助成金による資金援助を受けて実施した(課題番号: 15K16729; 「アイスランド語発音辞典データベース構築のための記述言語学的基礎研究」; 代表者: 三村竜之)。

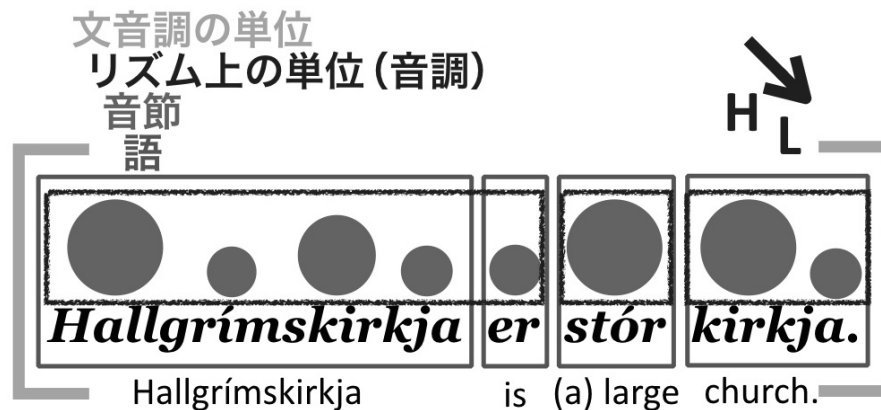


図1: 文音調の仕組み

1.4 先行研究

既に冒頭にて言及したように、本研究の目的は、筆者の採取した一次資料を通じて、アイスランド語の文音調を記述する上で有益かつ重要と思われる諸概念の整理並びに提案をすることある。従って、本節では代表的な先行研究の紹介に止め、それらを批判的に検証することは差し控え、稿を改めることとする。

Bergsveinsson (1941) は母語話者である著者が読み上げた録音資料に基づく実験研究。文にまつわる様々な音声現象を扱った総論的研究。Pétursson (1978) は母語話者数名により読み上げられた数種類の平叙文の音調の遷移を実験分析したもの。Árnason (1994-95) は文音調の諸側面を広く浅く扱った総論で、Árnason (1998) はその要約版に相当する。Dehé (2009) は Árnason (1998) の主張を実験データに基づいて修正・拡充したものである。

2 議論の出発点として

2.1 文音調という用語について

「イントネーション」という用語で何を意味するかは研究者の間でそれほど大きな差異はないと思われるものの、例えば英語の発音指導においては、「上昇調はyesかnoの答えを求める疑問文に最も普通に用いられる」(竹林・斎藤 1991: 67)といったように、局所的な(この場合は文末の)音調を指して「イントネーション」と呼ぶことも決して稀ではない。

このような事情に鑑み、また本研究では文や句などの単位に被さる音調 (tune) 全体を捉えることを目的としているため、誤解を避けるべく、敢えて「文音調」という用語を用いた。従って、この点に留意する限りにおいては、本稿で用いる「文音調」はいわゆるイントネーションと読み替えて一向に差し支えない。

2.2 文音調の捉え方: 考察の手順

筆者の考える文音調の仕組みや捉え方を概略すると以下の通り(図1の模式図も参照のこと)。強勢を担うか否かを問わず、音節は母音を核とする以上、常に何らかの音調を伴うが、文音調を形作る上で特に重要となる(聴覚的に顕著な)音調は強勢を担う音節、いわばリズムの拍を担う音節の音調であると考え。

しかしながら、文音調を記述する上では、リズムの拍を担う音節の音調のみならず、後続する弱音節の音調をも含めた全体の方が重要である。このリズムの拍を担う音節と後続する弱音節からなるまとまりをリズム上の単位と想定し、句や文は必ずこの単位を一つ有すると考える。

文音調の基本は、このリズム上の単位に被さる音調が連なって出来上がるものと想定するが、リズム上の単位の内、最後のものには意味の切れ目や文の種類(例えば平叙文や疑問文)に対応してその他の単位とは異質な音調を伴うのが一般である。ここに文音調の単位の切れ目が存在すると考える。

以下、第3節において、リズムの担い手、リズム上の単位、文音調の単位、音調の型と意味機能

についてそれぞれ考察していく。

2.3 アイスランド語のアクセント

アイスランド語はストレス（強さ/強弱）アクセント⁵の言語であり、語は主強勢を担う音節を必ず一つ有する。並列的複合語（dvandva）などの一部の例外的事例を除き、主強勢は、語種（固有語か外来語か）の別や語構造（単純語か複合語か）の別を問わず、左から数えて一つ目の音節に置かれる（三村 2014b）。具体例を以下に示す（便宜的に大文字で綴ることによって主強勢の所在を示す）：

- (3) a. 固有語
- (i) *BAN*ki [báʏŋki] 「銀行」
 - (ii) *HER*bergi [hérbergi] 「部屋」
- b. 外来語
- (i) *RABarbari* (sic) [rábbarba(:)ri] 「ルバーブ【植物】」
 - (ii) *SUKkulaði* [sú^hkkula:ði] 「チョコレート」
- c. 複合語
- (i) *BAN*kastræti [báʏŋkastræt̪i] 【固有名詞（直訳「銀行通り」）】
 (< *BAN*ki [báʏŋki] 「銀行」 + *STRÆ*ti [strá:ti] 「通り」)
 - (ii) *RABarbarakaka* (sic) [rábbarbarak^há:k^há] 「ルバーブジャムのケーキ」
 (< *RABarbari* (sic) [rábbarba(:)ri] 「ルバーブ」 + *KAKa* [k^há:k^há] 「ケーキ」)

なお、筆者の立場では、語は自立度の強弱（自立語か附属語かの別）を問わず、必ずアクセントを有すると考える。語は、単独（引用形）では常に強勢を伴って発音されるが、語によっては句や文を形成する際に強勢が実現しないことがある、という解釈である。

2.4 語の引用形から見たアイスランド語の音調

主強勢の置かれた音節の卓立を主観的音声観察により捉える上で、これまで筆者は強勢の置かれた音節の構造（いわゆる音節量）と音調に着目してきた。前者に関しては、(4)の例からも読み取れるように、強勢を担う音節はV(C)構造は許されないという制約にまとめることが可能である：

- (4) a. *sjö* [s'jói] 「七」、*bý* [bí:] 「住んでいる 1ST.SG.PRES.」
- b. *glas* [glá:s] 「グラス、コップ」、*ís* [í:s] 「氷、アイスクリーム」
- c. *vatn* [vá^htn] 「水」、*oft* [óft] 「度々」
- d. *dönsk* [dóensk] 「デンマーク(語/人)の」、*ensk* [énsk] 「英語の/イギリス(人)の」

一方、後者の音調に関しては、強勢を担う(と推定される)音節は「高平調 (H)」や「下降調 (F)」、「上昇調 (R)」を伴い、後続する(強勢を担わないと推定される)音節は相対的に低い音調 (M/L) を伴い、複数存在する場合は漸次的な音調の下降を示す。単純語の例を以下に示す：

⁵ アクセントという用語に関して若干の補足を行う。韻律的に（換言すれば、語音のレベルとは別に）語（正確には「アクセント単位」）のまとまりを生み出し、また語を特徴付けるものを筆者は「アクセント」と捉え、その音声実現はアクセント自体を規定する上での必要条件ではないと考える（cf. Abercrombie 1960）。また、アイスランド語のみならず英語も含めて主強勢の位置は「局所的 (local)」ではあるが、具体音声のレベルでは主強勢音声特徴が隣接する音節をも含めて語（正確には「アクセント単位」）全体の (global) 音形を規定するものであると考える。以上の理由から、筆者は、アイスランド語や英語などの強勢を「ストレス（強さ/強弱）アクセント」と呼ぶ。

(5) a. 一音節語:

mars [má:rs H] 「三月」; *kjóll* [k'jóʎtʰ F] 「ドレス」; *starf* [stárf R] 「仕事」

b. 二音節語:

maður [má:ður FL~RL] 「男性・夫」; *frænka* [fræ:ŋka HL~FL] 「叔母・従姉妹」

c. 三音節語:

borgari [b'orgari HML] 「市民」; *leikari* [léikari RML] 「俳優」

既に言及した通り、アイスランド語では主強勢を担う音節に現れる音調の向きは音韻論的には指定されていないため、複数種の音調が現われ得ると考えられる。

3 アイスランド語文音調の記述に向けて

3.1 リズムの拍の担い手

文や句を構成する語を組み立てている個々の音節は、定義上、母音を核とするため常に何らかの音調を担っている。その中でも、特に聴覚的に顕著であり文音調を作る上で重要なものは、リズムの拍を担う強音節が担う音調である。この点で、文音調を考察する出発点として、文や句のリズムの基盤となるリズムの拍について考察する必要がある。

まず以下の文を比較されたい:

(6) a. *SIGríður* *KEmur* *BRÁðum*.

Sigríður N. come V. soon ADV.

「Sigríður【人名】は間もなく来ます。」

b. *SIGríður* *KEmur* *á* *MÁnudag*.

Sigríður N. come V. PREP. Monday N.

「Sigríður は月曜日に来ます。」

上の二つの文は語数が異なるにも拘らず、いずれもリズムの拍の数は共通している。ここから、リズムの拍を担う語と担わない語があることが読み取れるが、では、アイスランド語ではどのような語にリズムの拍が現れるのであろうか。

英語においてはいわゆる「内容語 content words」がリズムの拍を担いやすく、一方で「機能語 function words」は拍を担い難いことが唱えられてきたが (e.g. Pike (1945: 118))、アイスランド語に関してもほぼ同様であると筆者は考える。具体例を以下に示す:

(7) a. *Petta* *er* *BLÁR* *PENni*.

this PRON. be AUX. blue ADJ. penn N.

「これは青いペンです。」

b. *Það* *er* *GAMAN* *að* *HITta* *þig*.

it PRON. be AUX. fun N. to PREP.? meet V. you PRON.

「お会いできて嬉しいです。」

c. *Hvaða* *DAGur* *er* *í* *DAG?*

what INT. day N. be AUX. in PREP. day N.

「今日は何曜日ですか。」

d. *Vala TAlar ekki DÖNsku, en hún TAlar ÍSlensku.*

Vala N. speak V. not ADV. Danish N. but CONJ. she PRON. speak V. Icelandic N.

「Vala【人名】はデンマーク語は話ませんがアイスランド語は話します。」

e. *TAlar hún DÖNsku eða SÆNsku?*

speak V. she PRON. Danish N. or CONJ. Swedish N.

「彼女はデンマーク語を話すのですかそれともスウェーデン語を話すのですか。」

現時点では資料が限られているため詳細な分類は今後の課題となるが、現時点では、以下のよう
に分類することができよう：

(8) a. リズムの拍を担いやすい語：

普通名詞、固有名詞、動詞、形容詞、副詞

b. リズムの拍を担い難い語：

助動詞 (be 動詞に相当する *vera* 含む)、代名詞、前置詞、

接続詞、疑問詞、(否定副詞)

なお、リズムの拍を「担う」か否かという固定的なグループ分けというよりはむしろ、「**担いやすい**」か否かという**緩やかな基準**で捉えている点に注意されたい。従って、強調など条件が整えば、拍を担い難い語であっても拍を担うことがあると筆者は考える。例えば下に示した文では、本来ならばリズムの拍を担い難いbe動詞に相当する *eru* がリズムの拍を担っている：

(9) *HÉrna Eru KJÚKlingar.*

here ADV. be AUX.PL. chicken N.

「これは鶏肉【複数形】です。」

これは *Hérna er kjúklingur* のように単数形を含む文と並べて読み上げた際に得られた資料であるが、単数形 *er* との対比の結果 *eru* が強調され、リズムの拍を担っていると考えられる。

3.2 リズムと文音調の二つの単位

3.2.1 リズム単位

既に述べた通り、定義上、音節は母音を核とするため必ず何らかの音調を伴うが、特にリズムの拍を担う音節には聴覚的に顕著な型の音調や音調の遷移が観察される。しかしながら後述するように（第3.3節）、リズムの拍に後続する弱音節に現れる音調がむしろ有意義である場合もあるため、拍を担う音節の音調のみを捉えるのではなく、後続する弱音節を含めたまとまり全体に被さる音調として捉える方が文音調を記述する上で有意義であると筆者は考える。

このようなリズムの拍とそれに後続する弱音節も含めたまとまりを「リズム単位 *rhythm unit*」と名付けることにする。リズム単位を次のように定義する（便宜的に「||」の記号でリズム単位の切れ目を示すこととする；黒丸はそれぞれ音節を指す）：

(10) a. 定義：リズムの拍を担う音節から次のリズムの拍を担う音節の直前の弱音節まで

b. 例： *EInar er KENnari.* 「Einar【人名】は教師です。」

Einar N. be AUX. teacher N.

|| ● ● ● || ● ● ● ||

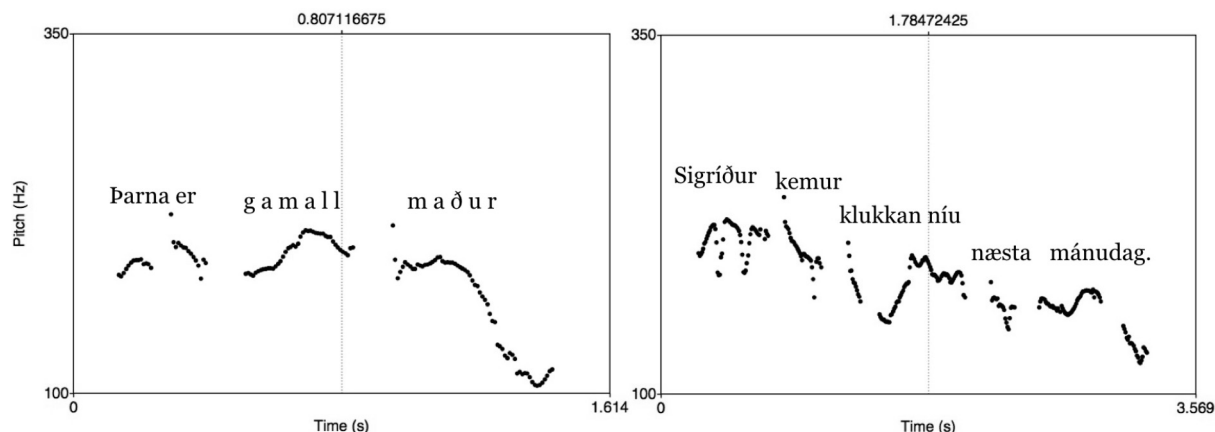


図2: *Parna er gamall maður.* と *Sigríður kemur klukkan níu næsta mánudag.* のピッチ曲線

上に示した *Einar er kennari.* という文はリズムの拍が二つあり、二つのリズム単位から成ることがわかる。リズム単位はあくまでも韻律の面から音節をまとめたものであり、従って、統語論的な意味での語境界とは必ずしも一致しない点にも注意されたい。

なお、筆者が提案するリズム単位は、英語音声学の伝統的な用語で *foot* と呼ばれている単位 (e.g. Abercrombie 1967: 131) に相当するものである。なぜ強勢を担う音節から *foot* を数え始めるのか、換言すれば、なぜ *foot* の終わりを「強勢を担う音節まで」としないのかに関して詳細に述べた論及を筆者は浅学にして知らない。しかし、アイスランド語においてはそもそも語の左端の音節が主強勢を担うため、強勢を担う音節からリズム単位を数えることに積極的な動機付けがあると考えられる。

前節 (第 3.1 節) において、リズムの拍を担い難い語であっても条件が整えば拍を担いうことを指摘したが、リズムの拍が増えるということはリズム単位も増えていることに他ならない。

(11)(=9) *HÉRna Eru KJÚKlingar.*

here ADV. be AUX.PL. chicken N.

|| ● ● || ● ● || ● ● ● ||

このように、リズム単位のまとまり方 (切れ方) は固定的なものではなく、種々の条件に依存して変動しうるものである点に注意されたい。

3.2.2 リズム単位の音調とイントネーション単位

文音調を記述する上で、リズムの拍を担う音節の音調だけではなく、リズム単位全体に被さる音調を考察する必要があることをすでに説いたが、ではリズム単位が担う音調とはいかなるものか。具体例を以下に示す (主観音声学的観察による個々の語の音調を記号にて示す; なお図2のピッチ曲線も参照) :

(12) a. *Parna er GAmall MAður.*

there ADV. be AUX. old ADJ. man N.

[M M M R H F L]

「あそこにいるのは年配の男性です。」

- b. *SIGríður* *KEmur* *klukkan* *Níu* *Næsta* *MÁnudag*.
 Sigríður N. come V. clock N. nine N. next ADJ. Monday N.
 [H H H F L L L HH H H H M L]
 「Sigríður は次の月曜日の 9 時に来ます。」

限られた資料に基づく分析のため十分な結論を導くには未だ至っていないが、少なくとも現時点ではリズム単位の音調に関して以下の二点を指摘することができる:

(13) a. 末尾のリズム単位:

第 2.4 節にて概観した語(引用形)の音調とほぼ同様の型の音調が現れている。

(e.g. (12a) の *maður* [FL]、(12b) の *mánudag* [RML])

b. 末尾以外のリズム単位:

リズムの拍を担う音節の音調は語(引用形)の主強勢を担う音節の音調に通ずる

(e.g. R, H, F)が、後続する弱音節は語の音調とは異なり、やや高い音調(H, M)で続く傾向がある。

文音調の基盤は、リズム単位に被さるやや高く平らに続く音調の連続と、末尾のリズム単位に現れる音調の総和に、さらに「自然下降 (declination)」が加わることで形作られると考えられる。この末尾のリズム単位は文音調の被さるまとまりの末尾に相当し、従って、末尾のリズム単位に被さる音調は文音調の被さるまとまりの意味的な切れ目を明示するとともに、このまとまりが持つ意味や機能を示す働きを持つと考えられる。

このような文音調の被さるまとまりを「イントネーション単位 intonation unit」、またイントネーション単位の末尾に位置するリズム単位を「イントネーションの核 intonation nucleus」、核に被さる音調を「核音調 nuclear tone」と呼ぶことにする。

筆者の提案するイントネーション単位は、形態統語論的な意味での文や句に必ずしも相当するものではなく、場合によっては一語でイントネーション単位を成す場合もある点に注意されたい。例えば、(5a)に示した引用形の *maður* の音調は(12a)の末尾の語 *maður* の音調とほぼ同様に下降調である。これは引用形の *maður* がそれ自体でイントネーション単位を成し、かつイントネーションの核として機能しており、引用形が文で言えば平叙文にほぼ相当する「言い切り」の形であるため、下降調が現れていると考えられる。

3.3 各音調の意味・機能

最後に現時点で明らかとなっている範囲で、文種類や意味と核音調の型との関係に関して概略を示す:

(14) a. 平叙文（言い切り）と下降調

これまで引用した例に既に含まれていたが、平叙文のイントネーション核には漸次的な音調の下降、あるいは拍を担う強勢音節内での下降調が現れる:

- Parna* *er* *SONur* *BJÖRNS*.
 there ADV. be AUX. sun N. Björn N.
 [M M M H H F]
 「あそこにいるのは Björn の息子です。」

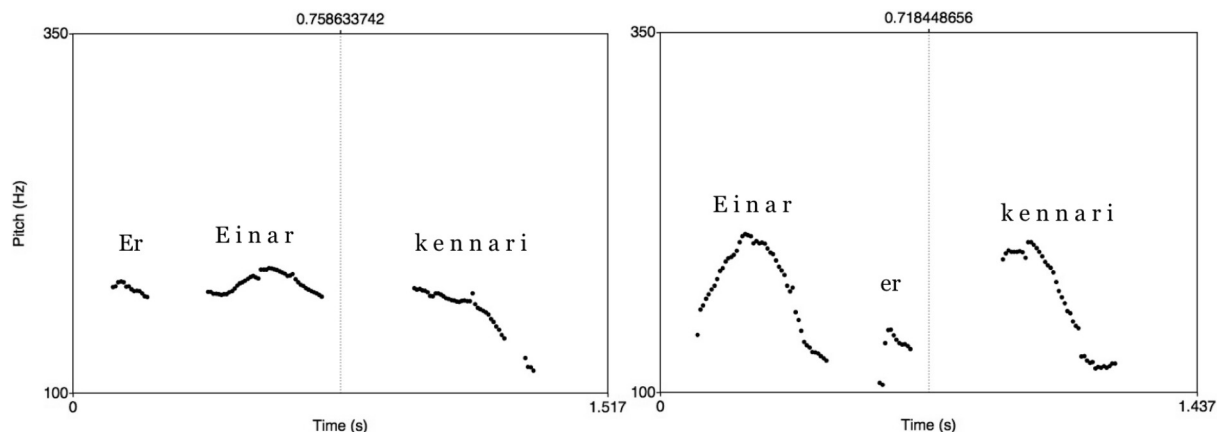


図3: *Er Einar kennari?* と *Einar er kennari.* のピッチ曲線

b. 疑問文における下降調

疑問詞を用いるか否かに拘らず、疑問文のイントネーション核には漸次的な音調の下降（あるいは強勢音節内での下降調）が現れる:

(i) *Hvaða TUNGmál TAlarðu?* 「何語をあなたは話すのですか。」

what INT. language N. talk V. -you

[M M H M M L L]

(ii) *Er Einar KENnari?* 「Einar は先生ですか。」

be AUX. Einar N. teacher N.

[M H H H M L]

cf. (=10b)

Einar er KENnari. 「Einar は教師です。」

Einar N. be AUX. teacher N.

[H L L H M L]

c. 選択疑問文における高平調（非下降調）

英語の *or* に相当する接続詞 *eða* の直前でイントネーション単位が一度切れると考えられるが、この位置での核音調は全体として高く平らであり、音調の下降は観察されない; 但し、末尾では他の疑問文と同様に漸次的な音調の下降が観察される:

(=7e) *TAlar hún DÖNsku eða SÆNsku?*

speak V. she PRON. Danish N. or CONJ. Swedish N.

[H M M H H M M H L]

「彼女はデンマーク語を話すのですか

それともスウェーデン語を話すのですか。」

d. 列挙する際の音調

複数の項目を列挙する際は個々の項目が単独でイントネーション単位を成すと考えられ、最後の核音調が下降調であるのに対し、その他の核音調には下降は観察され

ない:

HREINN, HREIN, HREINT 【形容詞 *hreinn* 「清潔な」の単数男性・女性・中性形】

[r̥éɪtn̩ H r̥éɪn̩ R r̥éɪnt̩ F]

e. 未完結の文における非下降調

等位接続詞で複数の節が結合される場合、接続詞の直前でイントネーション単位が切れることがあると考えられるが、その場合、核音調には下降調は現れずやや高く平らな音調が現れる:

(=7d) *VA*la *TA*lar *ekki* *DÖN*sku, *en* *hún* *TA*lar *Í*slensku.

Vala N. speak V. not ADV. Danish N. but CONJ. she PRON. speak V. Icelandic N.

[H H H M L L H H H H H H H M L]

「Vala はデンマーク語は話ませんがアイスランド語は話します。」

4. 結語

4.1 まとめ

以上、本小論考では、アイスランド語の文音調を記述する上で有意義と思われる単位や概念について考察した。本論考の要点を以下にまとめる:

(15) a. リズムの拍とリズム単位:

- (i) 文音調を形作る上で重要となる聴覚的に顕著な音調はリズムの拍である強音節が担う。
(従って文音調の記述においてリズムの考察が必要)
- (ii) リズムの拍の担いやすさは主として（その音節を有する）語の品詞に基づいて決定される。
- (iii) リズムの拍を担う強音節と（存在するならば）それに後続する弱音節を含めたまとまりをリズム単位とする。

b. 文音調:

- (i) 文音調の被さるまとまりをイントネーション単位とする; イントネーション単位は一つ以上のリズム単位から成り、末尾のものをイントネーション核とする。
- (ii) イントネーション核には文の種類などに応じて種々の音調（核音調）が現れる; その他のリズム単位の音調は傾向として全体的に高く平らに続く。
- (iii) 核音調の具体例: 平叙文（下降調）、疑問文（下降調）、選択疑問文（接続詞 *eða* の直前に非下降調）、列挙（高平/上昇調+下降調）、未完結の文（非下降調）

本論考において考察した諸単位並びには諸概念は、英語を始めとする研究の進んだ言語においては既に自明のものであり、従って、この意味では、イントネーション研究の理論的側面における本研究の貢献は僅かであるかもしれない。しかし、未だ文音調の基本的側面において不明な点の多いアイスランド語に関しては十分に資するものであると筆者は考える。

4.2 今後の課題

既に言及したものも数点あるが、アイスランド語の文音調に関する今後の課題を改めて以下にまとめる:

(16) リズムの拍・リズム単位に関して:

- a. リズムの拍を担いえるか否かの点で語を詳細に分類（例: 否定副詞 *ekki* ‘not’ は拍を担い難いが、英語の *never* に相当する *aldrei* はおそらく拍を担いやすいのではないか）

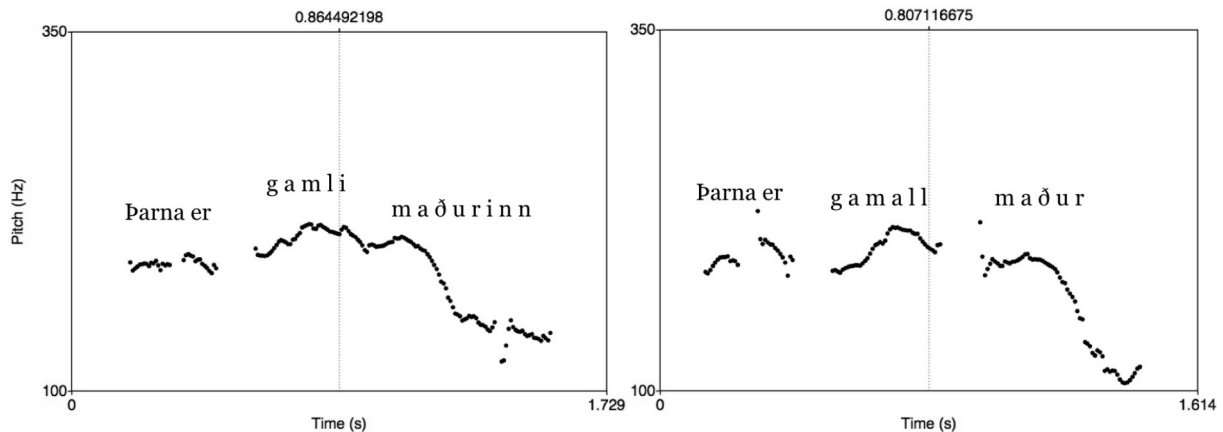


図4: *Parna er gamli maðurinn.* と *Parna er gamall maður.* のピッチ曲線

- b. (12b) の文で用いられている *klukkan Níu* ‘nine o’clock’ のような例外的 (*klukkan* は名詞でありながらリズムの拍を担わない) な事例の採取と分析 (ノルド語諸方言に類例あり; 意味的な説明が可能か: e.g. 三村 2008)
- c. リズム単位のとまり方/切れ方とその条件 (e.g. 情報構造と deaccentuation (cf. Ladd 1996: 185); 文単独での読み上げでは顕著な差異は確認されず: 図 4 参照; より自然な発話で検証が必要)
- (i) *Parna er GAMli MAðurinn.* 「あそこにいるのが (その) 年配の男性です。」
 - (ii) *Parna er GAmall MAður.* 「あそこにいるのは年配の男性です。」

音調の型に関して:

- (i) 核音調の具体例の収集並びに分析 (核音調の種類と文の種類や発話意図、談話機能などとの関係)
- (ii) リズムの拍に現れる音調 (上昇調、高平調、下降調) の意味や機能の解明; 意味や機能だけでなく音節構造も視野に入れる必要があるか)

上記の課題の幾つかは、先行研究において既に論及されているものもある。今後は、これら先行研究の批判的検討を通じて、アイスランド語文音調に関して未だ明らかとなっていない様々な点の解明を目指したい。

謝辞

本小論考は国立国語研究所プロジェクト共同研究「日本語レキシコンの音韻特性」(研究代表者: 窪園晴夫国立国語研究所教授) 主催の第 2 回研究発表会にて配布した資料 (三村 2015b) に基づいている。同研究発表に貴重なコメントを下された聴衆諸氏にこの場をお借りしてお礼を申し上げる。

また、本小論考に貴重なコメントを下された査読者の方々にもこの場をお借りしてお礼を申し上げる。

参考文献

- Abercrombie, David (1976). *Elements of General Phonetics*. Edinburgh: Edinburgh University Press.
- Árnason, Kristján (1994-95). "Tilraun til greiningar á íslensku tónfalli" *Íslenskt mál* 16-17, pp. 99-131.
- Árnason, Kristján (1998). "Toward an analysis of Icelandic intonation." Stefan Werner, ed. *Nordic Prosody: 7th Conference, Joensuu 1996*. Frankfurt/Berlin/New York: Peter Lang, pp. 49-62.
- Bergsveinsson, Sveinn (1941). *Grundfragen der Isländischen Satzphonetik*. Kopenhagen: Einar Munksgaard; Berlin: Metten.
- Dehé, Nicole (2009). "An intonational grammar for Icelandic." *Nordic Journal of Linguistics* 32.1, pp. 3-34.

- 川上 肇 (1973). 『日本語アクセント法』. 東京: 学書房.
- Ladd, D. Robert (1996). *Intonational Phonology*. Cambridge: Cambridge University Press.
- 三村 達之 (2008). 「アルファベット複合語から見たデンマーク語複合語アクセントと意味制約」. 『日本言語学会 第136回大会 予稿集』, pp. 294-299.
- 三村 竜之 (2009b). 「ノルド諸語からみたストレスアクセント: アクセント類型論の試み」. 『日本言語学会 第138回大会 予稿集』, pp. 202-207.
- 三村 竜之 (2014a). 「ノルウェー語Sandnes (サンネス) 方言における音調のアクセント論的解釈」. 『室蘭工業大学紀要』 第63号, pp. 77-91.
- 三村 竜之 (2014b). 「アイスランド語の副次強勢とリズムに関する覚書」. 国立国語研究所プロジェクト共同研究 第3回研究発表会配布資料 (2014年11月14日、松山大学文教キャンパス).
- 三村 竜之 (2015a). 「アイスランド語における無声歯茎ふるえ音の解釈について」. 『日本言語学会第150回大会予稿集』, pp. 284--289.
- 三村 竜之 (2015b). 「アイスランド語文音調序説」. 国立国語研究所プロジェクト共同研究第2回研究発表会配布資料 (2015年11月27日、名古屋大学東山キャンパス).
- Pétursson, Magnús (1978). "Intonation i den enkle deklaratve sætning i islandsk." Eva Gårding, Gösta Bruce, Robert Bannert, eds. *Nordic Prosody: Papers from a Symposium*. Lund: Department of Linguistic, Lund University, pp. 33-41.
- Pike, Kenneth Lee (1945). *The Intonation of American English*. Ann Arbor: University of Michigan Press.
- 竹林 滋, 斎藤 弘子 (1991). 『ライトハウス英語発音の基礎 改訂版』. 東京: 研究社.
- 上野 善道 (1975). 「アクセント素の弁別的特徴」. 『言語の科学』 6, pp. 23-84.

執筆者紹介

氏名: 三村 竜之 (みむら・たつゆき)

所属: 室蘭工業大学大学院工学研究科・ひと文化系領域准教授

Email: m76tatsu@gmail.com